

# みらいびき

令和2年11月  
第134号  
東京都公立学校  
情緒障害  
教育研究会

## 指導にあたる教員の資質・専門性の向上と

### 制度定着を図るための具体的な方策

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

国立市立国立第二小学校長 小林理人



す。  
本会にとっては、初めてとなるこの研修会を通して、次の二つのことを感じました。

#### ◆オンラインの良さ・対面の良さ

コロナ禍になり、動画配信による研修や学習の機会が多くなりました。

そして、それに慣れるにしたがいその良さや可能性について考えるようになりました。

一堂に会することなく研修会を行うことで、これまでの負担を軽減し、必要な情報を得ることができました。オンラインの良さを生かして得るものは想像以上に多いかもしれません。

また、その反面、オンラインでは得られないものがあることも感じます。文字や言葉の情報だけでは伝わらない気持ちや感情などを大切に指導では対面でなければ難しいと感じました。

#### ◆特性に応じた指導

コロナ禍で、これまでできていた指導や活動の中でできなくなっただけのものがあります。

しかし、私たちが関わっている子供たちには特性上必要な指導や活動があります。たとえば、コロナ禍であっても、指導方法や環境を工夫して、特性に応じた指導や活動は行う必要があります。

オンライン研修では、動画をもとに、サテライト校での話し合いや、オンラインでの質疑を通してコロナ禍でも大切にしている指導や活動、指導上の留意事項など具体的な事例を挙げながら確かめ合うことができました。

今後も、ウィズコロナの中での諸事業が続きます。事業を実施することだけで満足するのではなく、アフターコロナを見据えながら諸事業の内容や方法を工夫し、本会の目的である特性に応じた指導の質を高める事業を推進していきたいと思います。

で、実施方法を工夫して事業を進めています。

六月には、オンラインと対面を組み合わせた企画運営本部委員研修会を役員会と合せて実施し、多くの先生方にご参加いただきました。

また、九月には、「動画配信」という手法での研修会を行いました。コロナ禍で様々な対応がある中、各地区のネット環境を調査したり、配信する動画を作成したりするなど意欲的に仕事を進めるプロジェクトチームの先生方にはパイオニアとして精力的に準備にあたっていただきました。

そして、各地区の副会長、担当校長、サテライト校をお引き受けいただいた学校の校長先生、そして、各ブロックの役員の先生方には様々な準備と調整をしていただきました。心から感謝申し上げます。

二学期になり、文部科学省が示している「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」が改訂されました。

今回の改訂では、その背景として、これまで各学校で取り組んできた感染症対策により、学校内での感染拡大リスクを下げることであったことが報告されています。

また、このことを踏まえ、学習内容や活動内容を工夫しながら可能な限り、授業等の教育活動を継続し、子供の健やかな学びを保障していくという方向性が示されています。学校再開時から進めてきた学校における新しい生活様式の定着により、学校でできる活動の幅が少しずつ広がってきたことを感じます。

本会でも、学校再開後は、感染症拡大防止対策を十分に講じた上

# 令和二年度都情研実態調査報告

都情研企画運営本部調査担当 中村章

都内の全公立小中学校特別支援

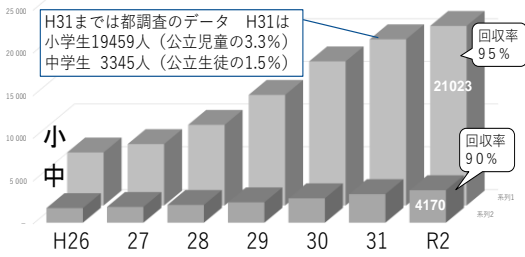
教室、自閉症・情緒障害学級、中学校情緒障害等通級指導学級について都情研で行った実態調査の報告をさせていただきます。

五月一日現在の実態について質問用紙形式で調査を行いました。回収率は、小学校九十五%、中学校九十%です。

## ① 在籍児童生徒数

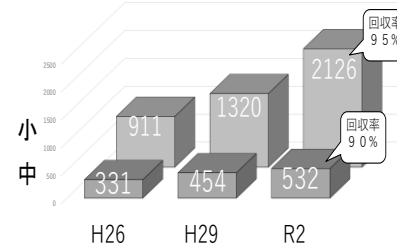
小学校では、平成三十年年度の特別支援教室全校設置以降も、在籍児童数の増加が続いています。中学校は来年度全校配置となります。

① 小中特別支援教室/情緒障害等通級指導学級利用者数



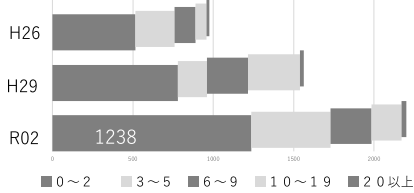
## ② 担当教員数

② 情緒(固定・通級・巡回)教員数

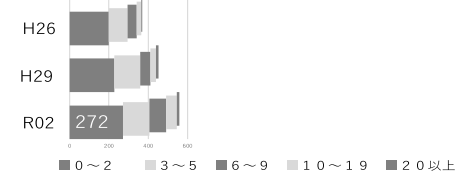


③ ④ 情緒経験年数割合  
児童生徒数増加に伴い、情緒経験の少ない教員の割合が増加しています。

③ (小) 情緒経験年数割合(固・通・巡)

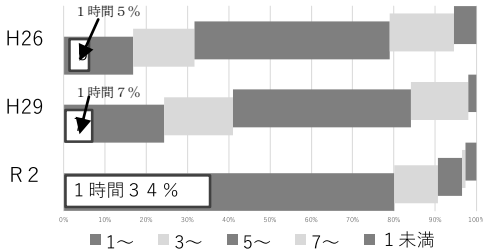


④ (中) 情緒経験年数割合(固・通・巡)

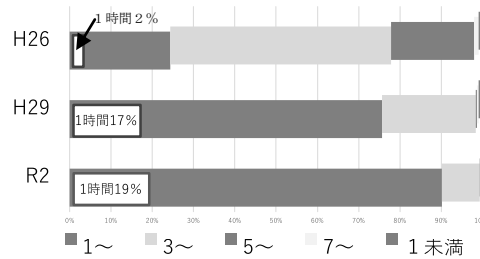


⑤ ⑥ 指導時間  
小学校児童一人当たりの週指導時間は、二時間以下が九割を占めています。中学校生徒の指導時間も、支援教室移行に伴い減少し、週一時間の生徒が増えています。

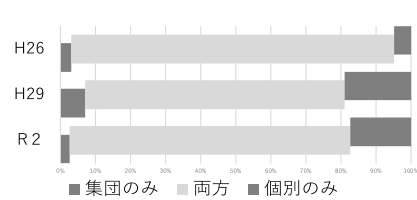
⑥ (中) 生徒一人あたり週指導時間(通級・巡回)



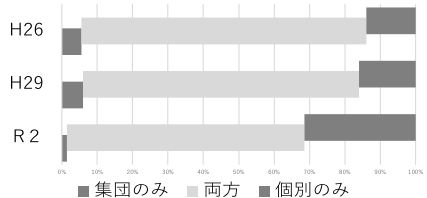
⑤ (小) 児童一人あたり週指導時間(通級・巡回)



⑦ (小) 指導形態別の児童数割合(通級・巡回)



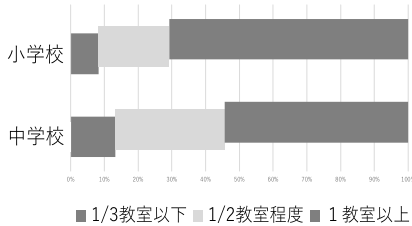
⑧ (中) 指導形態別の生徒数割合(通級・巡回)



⑦ ⑧ 指導の形態  
特別支援教室では、個別指導のみの児童が約二割、中学校支援教室では約三割に増えています。

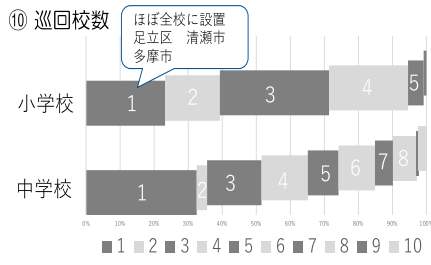
⑨ 教室の広さ  
環境整備が整っていない学校が依然多く見られます。

⑨ 支援教室の広さ



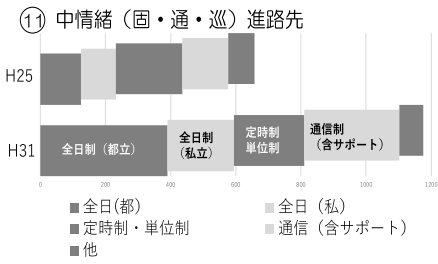
⑩ 巡回校数

小学校巡回校数は、ほとんどが四校以下で、巡回していない拠点校も二割あります。これらの多くは、支援教室を全校に配置している地区の学校です。中学校は制度移行中ですが、都心部を中心に地区全校を巡回する大規模拠点教室を設置している地区があります。



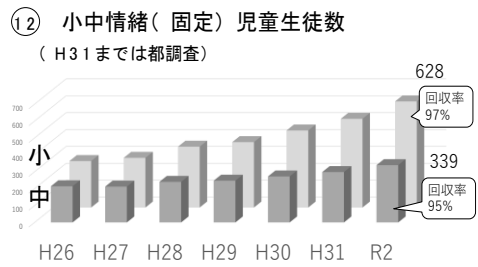
⑪ 中学生進路先

全日制（都立）と、通信制（含サポート校）に進学する生徒数が増えています。



⑫ 情緒固定児童生徒数

情緒固定学級の児童生徒数は、年ごとに増加しています。



⑬ 小学校情緒固定学級設置地区



【調査から考えられる課題】

(1) 担当教員の資質向上と定着化

担当教員には、資質と高い専門性が求められますが、教員養成のシステムが十分に整っていない現状があります。また、定着率も低く、小学校では経験が、初年度から三年目までの先生が全担当の半数を占めており、教室内で専門性を高めるためのOJTを行うことが困難な教室もあります。

本会で進める研修を充実させるとともに、研修に参加できる体制を整えるなど、担当教員が生き生きと、意欲とやりがいを感じて職務に当たれるような環境作りと、通常の学級の教員を含めた全教員に対する理解啓発等が課題となります。

(2) 指導時間と指導形態の工夫

特別支援教室制度に移行し、指導時間と指導形態は大きく変わってきましたが、限られた時間や環境の中でも質の高い指導を目指し、工夫していくことが求められます。そして、そのためには、対象児童・生徒数にあった教員数の確保が不可欠です。

これまでは、児童・生徒数の増加に伴い、教員数も増えてきましたが、充実した指導に必要な教員数が配置されていない現状もあります。教員定数の減少等で指導の質が低下しないよう、今後の教員

定数に関する動向にも注目する必要があります。

(3) 巡回方法の検討

現在、各地区では様々な巡回方法が行われています。全校に教室を配置している地区や、地区に一つの大規模拠点教室を設置している地区などがあります。地域性、在籍数、小学校、中学校の違いにも応じながら、各地区での工夫が期待されます。指導現場の実態等も報告しながらよりよい方法を模索していく必要があります。

(4) 固定学級増加への対応

今後予想される固定学級の増加に対応して、学級間での情報交換、連携、研修が必要です。特に、支援教室とは異なる情緒固定学級特有の課題も多くあると思われる、本会の研修等でも取り上げながら対応していく必要があります。

これらの調査結果の概要と調査から見えてきた課題については、東京都教育委員会や各地区の教育委員会にも情報提供し、担当教員の資質向上と指導方法の定着化等の課題解決につなげていきます。

各教室の先生方には、調査にご協力いただき、ありがとうございます。

令和二年度 都情研臨時研修会（オンライン研修）抄録

「特別支援教室」

感染症対策下での指導と配慮」

国立市立国立第二小学校校長  
西東京市立東伏見小学校指導教諭  
あきる野市立多西小学校主幹教諭  
調布市立石原小学校主任教諭  
小林 理人（本会会長）  
上山 雅久（本会企画運営本部総務  
中村 敏秀（本会企画運営本部総務  
尾形 俊亮（本会企画運営本部総務

第一部 座談会

一 はじめに

（小林）コロナ禍のため、都情研では昨年度末から予定されていた全ての事業が予定通り進まず、これまでとは違った形で進められています。コロナ禍の当初は打つ手もなく、延期や中止となる事業が多くありました。しかし、学校再開後は感染拡大防止対策を十分講じた上で、実施方法を工夫して事業を進めていきます。

各地区で準備を進めている事業のたたき台にしていたために、「特別支援教室 感染症対策下での指導と配慮」というテーマでこれから座談会を行います。現場で指導に当たっている先生方に日常の指導の様子や成果、課題などを具体的に話していただきます。

二 座談会

（小林）学校再開後の指導の中で感じていることや行っていることなどについてお話をください。

（尾形）感染防止対策に気を配りました。消毒、子供たちや教員のマスクの着用、そういったところの徹底を行っていました。一学期が始まった当初、それぞれの学校で学級開きがあったと思いますが、マスクをしたままの対面ということとで、通常の学級でクラスメイトの顔と名前が一致しないというようにうなことも聞かれました。

特別支援教室の指導では、人の距離を一定に保たなければいけない、道具の共有をしないなどの制約がある中で、どのように小集団指導を進めていけばよいのか悩みました。

（上山）私の学校でも休校中から特別支援教室の巡回指導教員と専門員で、オンラインの会議などを試しながらどうやって指導を再開していくかということをお話して進めてきました。その中で、マスクをして顔が隠れる状況を克服するためにフェイスシールドを使うって顔を見せられないかといううなことも話題に上がりました。

もう一点、今後ICTがかなり導入されて、どうやって特別支援教室で活用していくかということも実践研究がされていくかなと考えています。

（中村）私の学校も都内の他の学校のように、休校期間中に課題配布、分散登校を行ってきましたが、その間にスモールステップという形で、特別支援教室の子供たちに新しい担任の先生が個別に関わって、かえってスムーズにスタートできた子もいたなど感じています。

一方で、不安が強くて、コロナウイルスに感染するのではないかとということと、とにかく学校を休ませるといふ訴えをする保護者の方もいました。また、マスクをたまたまずらして話しているクラスの子に対して「許せない」と訴える子がいて、その子の特性ならでの反応があり、教室でどのように対応していったらいいのかと話し合った一学期でした。コロナ禍の問題なのか、それともASD（自閉症スペクトラム障害）の問題なのか、そんなことも考えさせられる一学期でした。

（小林）三人の先生方から伺った話を整理すると、いくつかの話の柱に整理できそうに感じています。一つ目の柱は、コロナ禍の指導の課題です。これまでと違った環境の中で様々な課題がありそうです。マスクで子供たちの顔が覚えられないとか、不安で学校に来づ

らなくなったとか、トラブルが多くなったとか、様々な課題がありました。コロナ禍での指導の課題とこの一つ目の柱にしたいと思います。

二つ目は、コロナ禍での指導の工夫も様々あったようです。フェイスシールドのような工夫がありました。二つ目の柱をコロナ禍での指導の工夫としたいと思います。三つ目は、このコロナ禍でICTの活用が一気に進んだ感じがします。おそらく先生方もそれをお感じになっているのではないかと思います。これからどんなICTの活用が考えられるか、これについて三つ目の柱にしたいと思います。

（二）コロナ禍での指導の課題

（上山）マスクを着けて話すと、声を大きくしないとなかなか伝わらないことがあります。「マスクをしたらちよっと大きな声を出しましょう」と呼びかけます。みんながマスクをしているという新しい課題です。

もう一つ、子供たちの中で、友達の名前が覚えられない、見分けがつかないということが起こっているのではないかと思います。そもそもASDの子供たちの障害特性として、顔の見分け、人への興味・関心、表情への注目がなかなかうまくいきません。顔の輪郭に目がいつてしまつて顔の表情に注

目がいかなくて、見分けがつかない、表情を読み取れない、意図がなかなか伝わらないという課題があります。その上、マスクをしてしまうと、そうした課題はどうなってしまうのだろう、大きな課題だなど思いながら、その対策を考えてきました。

(小林) マスクのこと以外で、他にどんな課題がありますか。

(尾形) 小集団指導で今までやってきたことの中で、できないことが出てきてしまうのが課題だと思います。みんなで向かい合っている活動とか、道具を共用する活動とか、そういったことが制限されているので、試行錯誤しています。

(小林) その他にこんな活動もできなくなったということはありませんか。

(上山) ソーシャルディスタンスという言葉が今よく聞かれます。人との関わりの中の「人との距離」についてこれまで特別支援教室で指導してきましたが、ASDの子供たちは人との距離のとり方が近過ぎてしまったり遠過ぎてしまったりすることがあります。パーソナルスペース(不快に感じる対人距離)という言葉がありますが、腕一本伸ばした距離より近付くことができるのは特別な関係だよと今まで教えてきました。友達に親しく接したり慰めてあげたりするなどというときには、パーソナルスペースに入って優しく接する場

面があります。それとソーシャルディスタンスとの関係を考えました。ソーシャルディスタンスと言われると、離れていなければならぬイメージが強くなってしまい、これまで指導してきたパーソナルスペースと混乱してしまう課題も出てきているかなと思います。

(中村) 気持ちが落ち込んで固まってしまいうちに、担当の教員が近寄って寄り添い、「どうした、何が嫌だったの」と話しかけたら、いつもならそのまま固まっているのに、その子が「先生、ソーシャルディスタンス」と早々に口を開き、寄り添った教員も「ごめん、ごめん」と言っていて離れていったということがありました。いつもは固まったままだった子が早く気持ちを切り替えられてよかったという出来事ですが、指導が終わった後に教員同士で振り返って、「それはその子の言っていることが合っているのかな。教員が寄り添ってあげたのに」という話になりました。何を教えなければいけないのか混乱します。コロナウイルス感染防止の観点からだとなつてしまいかも間違っていているとなつてしまいかもしれないけど、今までなら「先生が寄り添ってあげているんだよ」と教えて、パーソナルスペースという点から、その関わりの意図を教える場面だったはずですよ。そうすることが混乱すると思いました。(小林) これまでのお話を振り返

ると、まずはマスクに関わる課題、そして今までできていた指導ができなくなったという課題がありました。また、ソーシャルディスタンスというコロナウイルス感染防止の特有の考え方と子供たちの特性に応じた指導との関係から出てきた課題がありました。

## (二) 指導の工夫について

(小林) 先生方はどのような指導の工夫をしながら、子供たちと関わっているかということを次の内容の柱にしたいと思います。

(上山) 私のいる特別支援教室では、特別支援教室の指導にとってやはり表情を見せることがすごく大事だということ、マスクに代えてフェイスシールドを使ってみようという話になりました。たくさんいるASDの子供たちがどこに注目するか、顔のどこに目が行ってしまふのかということ、考えると、フェイスシールドの額に当たる青い部分や、透明のシールドの輪郭があまり透明度の低い物だとすごく気になってしまいます。それからフェイスシールドに映る光の反射も気になってしまいます。なるべく透明度の高い物で、額に当たる部分は青い物ではなくて黒の方がいいのではないかとということになりました。そうすると髪の中に紛れます。シールドの部分は分離するようになっていて、マジックテープで止められるようにな

っています。こうすると、自分の好きな角度で、見えやすい形になります。光の反射なども抑えられます。

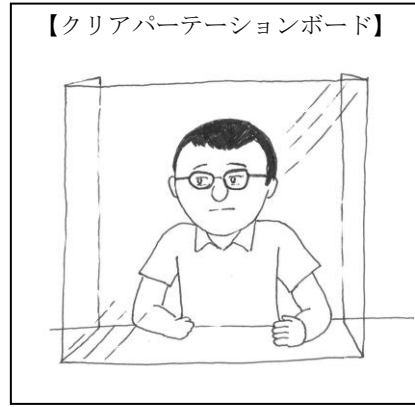


やはり指導者が顔を見せて、表情から何かを読み取らせることが大切です。「先生がああ顔をしているから自分の行動が間違っているのだな」と、自分の行動を直さないといけないと気が付きます。行動修正を指示するのも言葉で言うのではなくて、表情で読み取らせる指導ができるようになります。

(尾形) 会話の指導をする時にクリアパーテーションボードを使っています。これは机の上に置いて使うタイプです。学校によっては手作りするなどそれぞれ工夫されていると思います。落ち着いてゆっくり話す場面で使っていて、有効だなと感じています。

(上山) クリアパーテーションボードは、子供同士で座って相談などをするといい場面です。手軽でいいかなと思います。例えば、協力オ

セロなどで、今オセロを対面で向かい合いながら勝負することができなかつたり、同じ物を共用で使うということができなかつたりするので、相談する時にはクリアアパーテーションボードを使います。



また、違う工夫ですが、オセロなどでは、先生が子供たちに言われた石をひっくり返すというふうになると、触るのは先生だけということになります。その代わりに、子供たちは相談して先生に対して「上から何段目、左から何列目の石をひっくり返して黒にしてください」というお願いをして、「コミュニケーションも協力も入り、コロナへの対策で距離もとれて、同じ物を触らないという制約もクリアできます。そういったタイプの工夫がこれからほとんど必要になつてくるのかなと思います。「上から何番目、右から何番目」もやはりマトリクスの理解で、言葉の話になつたり、あるいはひっくり返す先生の立つ位置が変わつたら、

先生から見てどちらなのかという他の人の視点に立つて表現を変えたりという指導にも役に立つかなと思いました。

(小林)他に環境面でも活動面でもこのような工夫をしているというご意見はありますか。

(尾形)本校ではすぐろくをよくやっています。今までは一個のサイコロをみんなで回しながらやっていたのですが、人数分サイコロを用意してそれぞれが自分の場所です。サイコロを振り、盤も少し離れた所に置いて動かすという形です。すぐろくゲームなどを再開しました。そうすることで順番やルールを守るとか、それから勝ち負けを受け入れるとか、そういった指導では問題なくできるようになつたかなと思います。しかし、一個のサイコロだったからこそ指導できたこともあつて、例えば自分が振り終わった隣の人に渡してあげるとか、サイコロを振って確認してコマを動かすまではそのサイコロは次の人が触ってはいけないとか、共有のサイコロでないとできないこともあつてなかなか難しいなと感じています。

(上山)友達にサイコロの目を見せるというところが、ちよつとしたポイントですが、とても大事な視点かなと思います。何が出たかというのはいきな興味があつて、その子がゾロ目で六と六で十二を出すときみな「おー」って思うの

だけれども、その子だけがこつさりやっていたのではみんなが楽しくない。

(中村)道具の共用はなかなか難しい点ですが、例えば坊主めくりで、他の人の視点というのがない子は自分の方へめくって一人だけ見て「坊主だ」と落ち込みます。どうめくるといいのかわからないことが、相手の視点があるかないかという点につながります。カードゲームなどでは、勝ち負けの話ばかりになりがちですが、実は他者視点があるかないかという要素があります。

上山先生のオセロの話も、なんて面倒くさい手続きを踏んでやっているのだろうという話になるけれども、オセロをうまくやることよりも、人に伝えるとか相談して決めるとかそういう活動をやらせようということにオセロが使われているように思います。実は普通にオセロをするよりも、よっぽど教材としては有効な、コロナが生んだいい教材みたいな感じですね。

(小林)今、環境面での工夫や活動面での工夫ができました。中村先生が冒頭で、コロナ禍でとても不安が強いお子さんがいるという話がありました。そういった不安が強い子供たちに対してできる工夫はありますか。

(中村)不安の話はとても繊細な問題です。ASDの問題と言いついていいのかと、とても悩ましい

点があります。「気にし過ぎだよ」とか「不安なのだからしょうがないね」とか両極に分かれやすいのですが、「コロナで学校に行きたくない、心配だ」という話は、本当にあり得ます。保護者の方が医療従事者の方だったり飲食関係の方だったりすると学校に通わせていいのかなどとても繊細な問題です。

一方で、ある子の話ですが、不安が強く学校に行きたがりませんでした。保護者としては行って欲しい。その子が「お願いだから感染者が十人を超えたら休んでいって約束してくれ」と言っていると、保護者から相談を受けました。その子は一回思い込んだり決めたたりすると聞く耳をもたないという課題がありました。「きつと〇〇君が僕に悪口を言うに違いない」と思い込んで学校に行きたがらないこともありました。「学校に行つてみて、悪口言われないかもしれないでしよ。言われたらちゃんと先生に報告しなさい」と保護者が話したり、実際に言われなかつたら「そんな日もあるんだね」

「君の心配は案外平気で終わったね」と言うことができる経験をさせられたりするように指導してきました。そうになると、ウイルスがうつるかもしれないけどどうつらないかもしいれないという話になり、「その子に『一体今どのくらい大変なのだろう、心配なのだろう』というのを一緒に話していくとい

うことがとても重要じゃないか」とその子の保護者と話しました。その辺りのことがやはりASDの子だからなのか、不安が強いという話なのか、これも指導の課題としてとても大事なのかなと思っています。

### (三) ICT活用の配慮について

(小林) コロナ禍でICTの活用が一気に進んだ印象があります。私たちが行っているこの指導の中でも、いかにしてICTを活用していくかがこれからの大きな課題になりますので、その辺りでお話を伺いたいと思います。

(尾形) 皆さんの教室でも「こんなときどうする」といった状況を理解させる指導をすることがあると思います。本校ではその指導のときに、今までは教員が実際に寸劇を演じて見せていました。しかし、コロナ禍でマスクやフェイスシールドをした状態で寸劇を見せても、台詞とか表情とかを伝えることが難しいなということを教室で話し合いました。そこで、動画に編集して見せるようにしました。そうすると、マスクやフェイスシールドを外して子供たちに見せられるというののもちろんなのですが、動画にすることで見る視点が明確になって分かりやすくなったり、もう一度巻き戻して見せたりできて、子供たちの理解が深まったなと感じています。

(上山) 私は「こんなときどうする」のようなことをやるときに、まず子供たちに「こんなとき」というのを説明、理解させなければいけないので、それをどう伝えるかと考えています。生身の人間が演じてしまうと刺激があり過ぎるし、表情も体も声の調子もいろいろなメッセージを発しているの、それをどうやって抑えてシンプルな形で状況を理解させるかということを考えて、ペープサートという手法を使ってやったこともありました。生の劇を見せるよりは、動画で撮影すると少し刺激が落ちるということと、子供たちの障害特性から考えると、モニターのフレームによって枠組みがはっきりして見る視点、どこを見ればいいのかっていうのが分かりやすくなってくると思います。

それから、やはり特性として曖昧なのが一番分かりにくいというのがありますので、論理的でルールがはっきりしているICTは分かりやすいです。だけど、ICTで得た知識は、曖昧なことや刺激がたくさんあるリアルな世界で活用しないと役に立ちません。知識はあるけど活用できない。そのギャップが非常に大きい。指導者が求めている状況、シチュエーションを理解させるには、十分役に立つICTかなと思います。やはり実際の場面を体験的に学んでいくということがいかに大切かと

いうことが、ASDの子たちの指導に携わっている先生方が直面する課題かなと思います。ICTの活用にあたって、障害特性に関する背景を押さえておかなければならないと思います。

(小林) 今、子供たちの指導というところで、こういうよさがあるよとか、こういう危なさもあるよということをお話してくださいました。あと、ICTについて、子供の指導だけでなく、我々教員の活用ということもあります。その辺りはいかがですか。

(上山) iPadなどのタブレットで動画も静止画もその場ですぐ撮影ができてしまいます。iPadだとアップルペンシルを使っている様子、手指の使い方とかを文字で記録するよりも動画で記録できてしまうというのはすごいなと思います。保護者に説明するときにも撮影した物を見せられます。それから、指導の際にはその場でよく逐次記録を取っています。今は専門員の方が記録を取っていて、それを後で整理していますが、整理の手間をかけるよりもタブレットが活用できれば色々考えられるなと思います。子供の作品も作った後遊んで壊れたりするけれども、その前にiPadで撮って、この状態まで仕上げるのができましたと保護者や在籍学級担任に報告できます。教材として使うと

いうよりも、我々が道具としていかに使いこなすかということが実は業務の効率化にもつながるし、色々な連携にもつながっていくのかなと思います。

### 三 まとめ

(小林) この座談会の最後のまとめとしてこの会を通して感じたこと、伝えたいこと、メッセージをお願いします。

(尾形) 前半にマスク、ソーシャルディスタンスの話題が出ました。ASDの特性として、表情の読み取りの苦しさがあります。マスクを着けて生活している毎日ですが、できるだけ表情が見える指導が必要だと思いました。

(中村) 特別支援教室は個別指導のみでいいのではないかと話がある中でASDの子供たちに小集団の指導が大事だと常に思っています。コロナ禍になって人が集まっていけない、だから小集団ではなくて個別だと安易に流れがちなのですが、子供たちが生の場面でどういう反応をするか、それをどう使っていくか、どう生かしていくかを学習する必要があります。そのためには小集団指導は本当に必要だと思っていて、いろいろな工夫の仕方が必要だと思っています。改めてコロナ禍だからこそ小集団をどうやっていくかを強く感じた会になりました。

(上山) コロナ禍で、タブレット

を大量に配布することなどに予算を使っていただけるのは非常にありがたいと思っていて、活用することは必要だと思うのですが、タブレットがたくさんやって来て使わなければいけないからと言って、安易にワーキングメモリーのソフトをやらせればなし、ユグトレをやらせればなし、読み書きのソフトをやらせればなし、与えてやればそれで一人で学習できるからOKという形になってしまうとよくないと思います。うまくICTのよさを活用しながら、やはり体験的に学んでいく、実際の生活の中でどう学んでどう知識を活かしていくか、そこが難しい子供たちで、

そこを特別支援教室でやるという形でうまく活用していくことが期待されます。情報量豊富に記録を取るといった記録性の優れたところもあるので上手にICT機器を活用していただき、その実践を都情研の中で広めていくのに協力頂けたらと思います。

(小林) 本校で特別支援教室と情緒固定学級の指導を一学期間見ていた中で強く感じたのは、やはり特性に応じた指導であり、専門性に関わるとても大事な仕事だなと感じました。この特性に応じた指導というのがこのコロナ禍でできなくなった、こういう活動は難しくなった、こういう活動はとてもしにくくなった、できないこととに今までは目を向けて来た気が

します。ところが、先生方は、もうそうではなく、できなかったことから、今どのような特性に応じた指導ができるのだろうかということをもう既に考え始めていて、それを実際にやっているというのを今日学んだところです。どんな環境であつても、我々がやらなければならぬ指導というのは決まっています。その目的についての認識を失わずに方法を工夫すること、今回の座談会を通してしっかりと確かめられたかなと思います。

## 第二部 質疑応答・意見交換 (ZOOM)

第二部は、事前に申し込みをした特別支援教室の先生方と都情研企画運営本部がZOOMを使ってリモートで意見交換、情報交換をしました。その概要をここに掲載いたします。

①ZOOMの環境、どのような形で参加しているか」については、学校の端末を使って参加している場合と、私物の端末を使って参加している場合があります。

②第一部の動画を観た感想」については、「マスクを着けずにフェイスシールドなどを使って表情を見せる指導を取り入れたい」や「フェイスシールドの額に当たる部分が黒い方が目立たなくて、それが気になる子供たちにとってはいいのかと思った」などがありました。一方で、「子供たちはお

互いにマスクをしている中で生活している、マスクをしている中でどうやって相手の意図を読み取るかの教え方の実践例を知りたい」という意見がありました。これに対して、声の調子やボディーランゲージのようなノンバーバルな言語、非言語を工夫する指導の必要性の話がありました。身振り手振りや頷きなどによって表現することを子供たちに意識させることが大事であるということでした。

しかし、そればかりでなく、やはり表情を読み取る指導も行うことが必要であるという話も出ました。

③それぞれの学校の特別支援教室での取り組み」については、「小集団指導はソーシャルディスタンスを取りながらなので少しコミュニケーションが取りづらい」や「衝立を教員が作って、子供たちがスピーチするときの前に立てて活用している」などの指導のやり方にきや工夫の話が出ました。

また、感染症対策に関する予算の問題や、巡回校毎の感染症対策の方針の違いの問題、コロナ禍で区内の特別支援教室の教員の研修会がもちづらいといった問題も話題に上りました。

### 【オンライン研修会動画視聴者からメールで届いた感想】

●コロナ禍において、感染予防対策の観点からこれまでの指導体制や形態を変えざるを得ず、「不便性」ばかり先行して捉えておりま

したが、オンライン研修を視聴し、この状況下でできる指導支援の工夫について考えることができ、大変勉強になりました。特別支援教室を利用する子供たちの学びを考え、今の状況でできる最善の対策や工夫を検討する、という視点をもつことの大切さを改めて実感できました。フェイスシールドやクリアパネル等の使用をもとに、より集中できる学習環境づくりに努めるとともに、「用具の共用をしない」からこそ育める力(伝達するコミュニケーション力、相意思識など)に着目したり、ICT機器活用の利点を生かしたりしながら、個に合う指導支援を行っていきます。他校の実践を知るといっても、自身の思考(コロナ禍における環境の捉え方)を見直す点でも、とても有意義な時間になりました。

(イラスト 廣田)

## 編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立明正小学校

(廣田智仁)

☎03・3415・5597